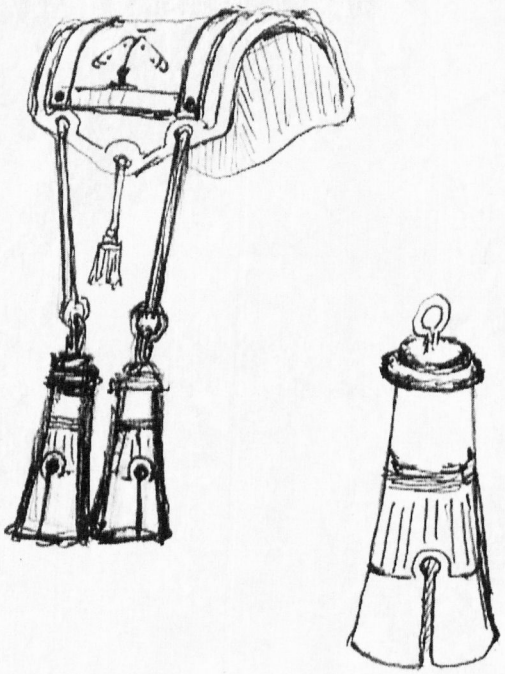
灰羽連盟

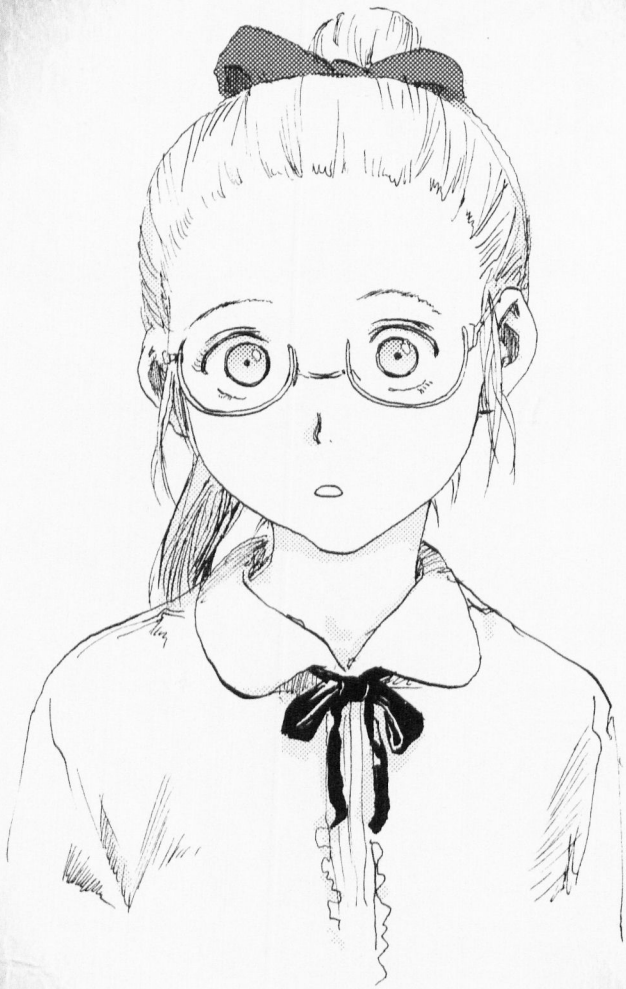
脚本集 第参巻

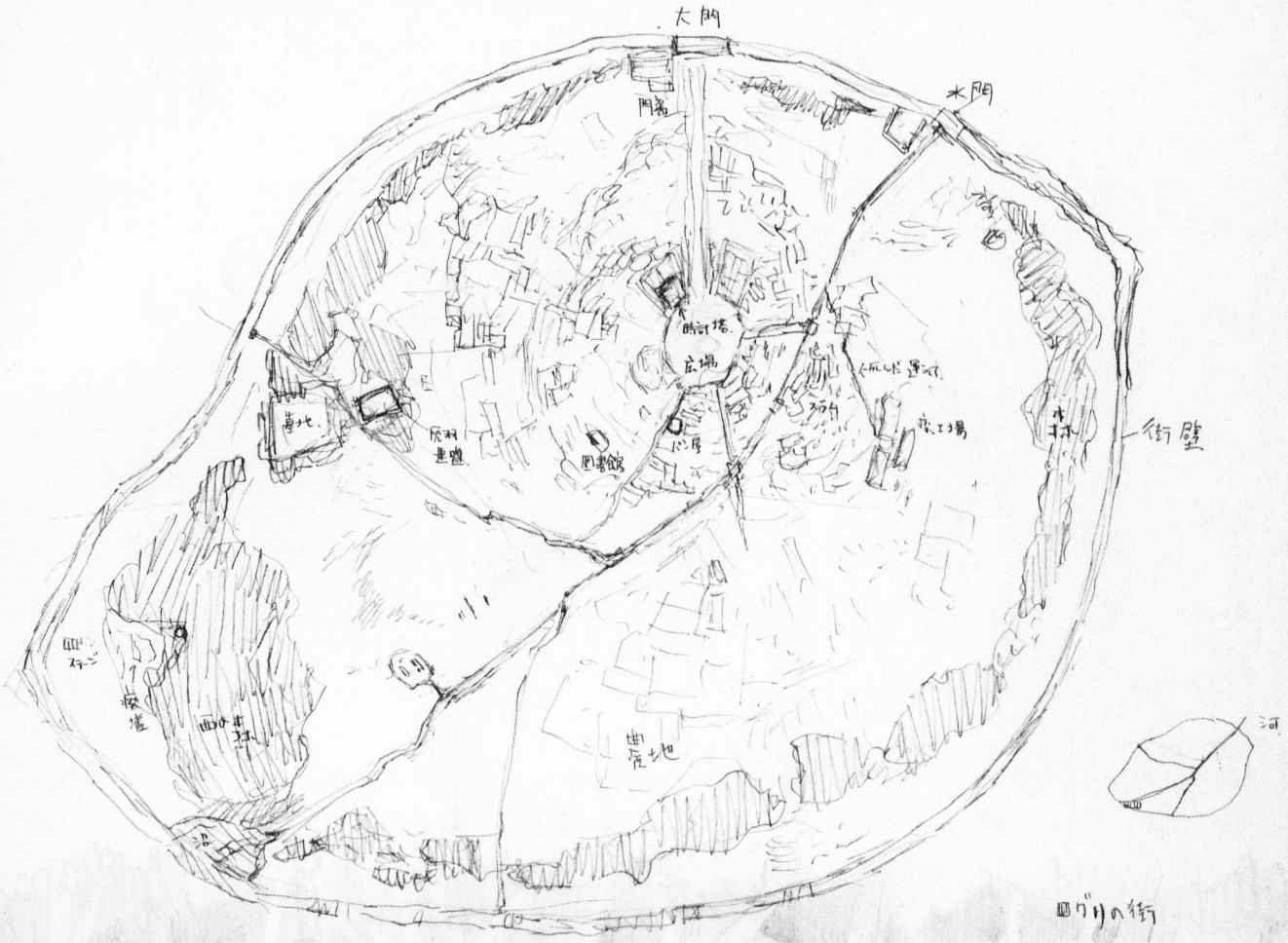


安倍吉俊

灰羽連盟脚本集

第参卷




大門
門番
水門
時計塔
広場
図書館
灰羽連盟
墓地
街壁
河
グリの街

灰羽連盟
LA FILLE QUI A DES AILES GRISES
HAIBANE-RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第03話 寺院・話師・パンケーキ

第3稿（2002.05.22）

●ページの上半分がシナリオになり、下半分が、シナリオに対応した注釈や、図解になります。

▲第3話。最初から脚本の形式で書いた初めての話。13話のペース配分として、3話はヒカリ、4話はカナ、5話はネムの話にしようと思っていた。

全体的な構成としては、物語中盤でクウがいなくなり、そこから物語のトーンが急変するのだが、それを何話にするかでいろいろと話し合いがあった。上田さんは後半絶対尺が足りなくなるからクウの巣立ちを5話にしようといい、ところ監督はそれでは観る側がキャラクターに馴染んで感情移入する時間が足りないという事で、7話にしようといっていた。結局あいだをとって（というわけでもないんだけど）クウの巣立ちのエピソードが6話にくるように、何となく調整しながら書き進めていった。もう少し話数があったとしたら、クウとラッカが親しくなる話をまるまる1話かけてやりたかった。クウが中心になる話をつくる事ができなかったので、2〜5話にかけて、クウがラッカの傍にいて、世話を焼いたり、話をするシーンをなるべくつくるようにした。クウのラッカに対する思いは、この話数で語られている。

○登場人物

ラッカ
レキ
カナ
クウ
ヒカリ
ネム

灰羽の子供たち、男の子A（ショータ）
灰羽の子供たち、男の子B（ダイ）
灰羽の子供たち、男の子C（初登場。名前なし）
灰羽の子供たち、男の子D（初登場。名前なし）
灰羽の子供たち、女の子A（ハナ）
年少組の寮母
灰羽連盟の話師
灰羽連盟の連盟員（セリフなし）

パン屋、店長
パン屋、店長のおかみさん
パン屋、従業員

▲子供達、まだこの時点ではダイとショータとハナ以外、名前がなかった。パン屋の面々も、名前がない。

● サブタイトル

● オールドホーム、廊下

人気のない薄暗い廊下。天井は剥き出しの配管。生活の痕跡が微妙に残りつつ廃虚化しつつある階段を、ラッカが恐る恐る、という感じで登ってくる。階段の踊り場には窓があり、窓際の棚には植木鉢が並んでいるが、花はとうに枯れている。階段の手すりの内側のコーナー部分に、何かの修繕用らしい、ベニヤのような板と角材が数本、立て掛けてある。

ラッカ「うわぁ……。人が住んでないとこは、ほんとにお化け屋敷みたい……」

ラッカ、踊り場を回ってさらに階段を登ってゆく。何気なく階段の手すりに手を置くと、そのわずかな重みで、手すりを支えている支柱がかすかに傾ぐ。鉄の支柱からパラパラと塗料と錆が落ちるが、ラッカは薄暗い階上に気を取られていて気づかない。

ラッカ、階段を登りきり、廊下に出る。廊下の左右に部屋があり、磨りガラスの窓はあるのだが、電気の通っていない廊下は階段より暗い。

ラッカ「たしか、この階だよね……」

ラッカ、足音を忍ばせるようにして数歩踏み出す。背後で突然カタン、と音。

ラッカ「ひゃあぁあぁ」

飛び上がるラッカ。髪の毛が逆立つ。階段下の踊り場の角材が倒れただけ。倒れた角材が、ぽふっとホコリを舞い上げている。

ラッカ「……なんだぁ」

ラッカ、ふう、と息を吐いて、乱れた髪の毛をなでつける。しかし髪の毛はへにょっとはねて光輪にくっついてしまう。

ラッカ「……もうっ。このわっか、変」

ラッカ、はねた髪の毛を直してはまたはね、を繰り返し

▲ようやくラッカが主人公らしく能動的に行動し始めた。といっても、おっかなびっくりですが……。このあたり、オールドホームの内部の様子をわりと丁寧に書いているが、僕自身も手探りするように内部の様子を想像しながら書いていた。ちょっと懐かしい。

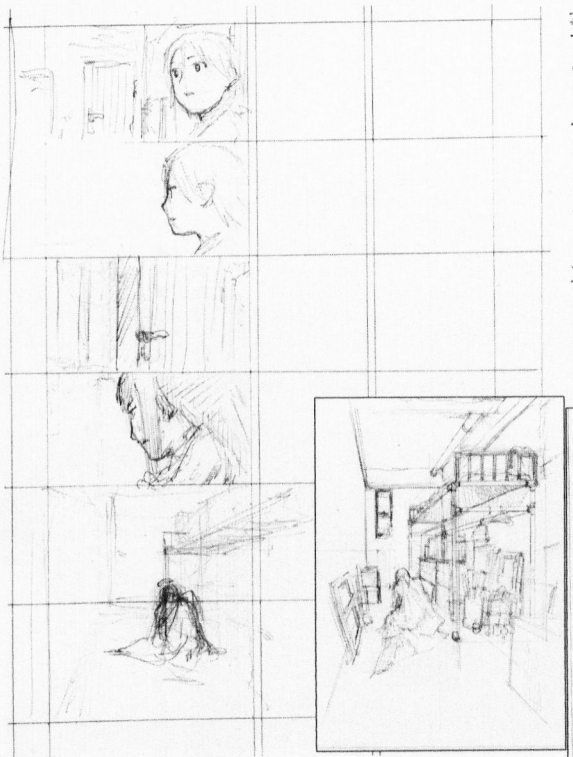
▲柱の支柱が傾き、塗料が落ちる、とあるが、オールドホームの実際の設定では、支柱はコンクリートで、塗装はない。この文章を書いた時は、階段の内側は、黒に近い緑で塗られた、鉄製の手摺りがあると想定していた。実際に絵にした時、どこかの段階ですべてコンクリートという設定になったようだ。今気づきました。本当に手探りですね。

ながらてくてくと廊下を歩く。ふと、床に何かを引きずった跡と靴跡をみつける。
ラッカ、廊下の奥へ続く跡をたどって歩く。少し奥に行ったところで、廊下の跡はドアの中に消えている。
ラッカ、そのドアの前でしばし逡巡。意を決して、ドアをノックしようとした瞬間、そのドアの中から、かすかに悲鳴。
声「うわあぁぁぁ」
ドサッ、ガン、という音。ラッカ、はっとする。
ラッカ「レキ！？」
ラッカ、ドアを開け、中に飛び込む。

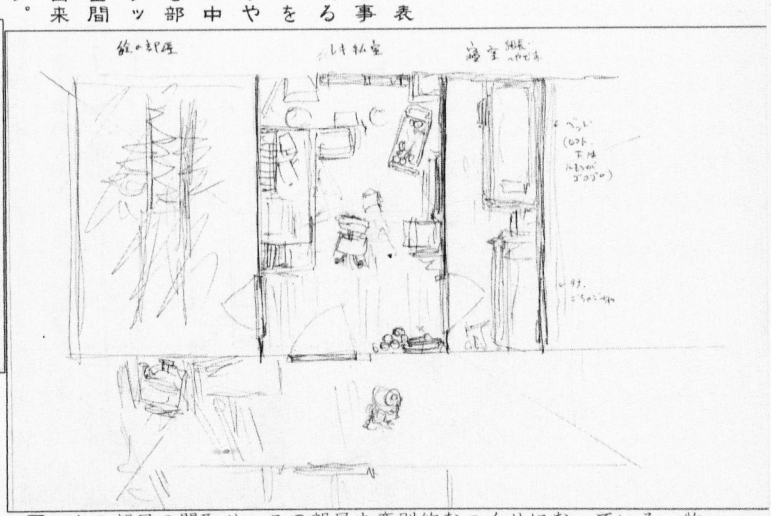
●レキの部屋

汚れた小さな部屋。部屋の外とは違って、生活の跡はある。灰皿代わりの空き缶が転がっている。簡素な机の上に乱雑に紙とパステルと鉛筆が散っている。椅子には絵の具で汚れた上着がくしゃくしゃにかけられ、タイル地の床にバケツが転がり、水が少しこぼれている。天井には裸電球。絵の具の匂い。布をかけて隠された何枚かのカンバス。レキの心の裏側、もう一つの側面を表すような、部屋の雰囲気。
ラッカ「……レキ？」
奥の部屋に人の気配。ドアはかすかに開いている。ラッカ、床に散らばった絵の具のチューブやら紙やらをよけるように歩き、ドアの前へ。ドアのすき間から向こうを伺う。
ラッカ「レキ！」
ラッカ、ドアを開ける。さらに狭い物置きのような部屋。ロフトベッドからずり落ちて、床の上で薄い毛布にくるまって、震え、汗をかいている。呆然とした表情。レキ、ラッカに気づく。
レキ「……ラッカ？」
ラッカ「ごめんね。すごい物音がしたから、勝手に入っちゃった」

▲レキの私室。ゲストルームがレキの表の面だとすると、私室は裏の面という事になる。みんなといる時に見せる、明るく前向きで、率先してリーダーシップをとるレキとは違う、ナイーブさや投げやりな感じ、ある種の諦念などが部屋の中に表れている。レキが自分から他者を部屋に招き入れる事はまずない事で、ラッカがこのような形でレキの個人的な空間に踏み込んだのは、まったく偶然の出来事である。でも、とても大切なシーン。



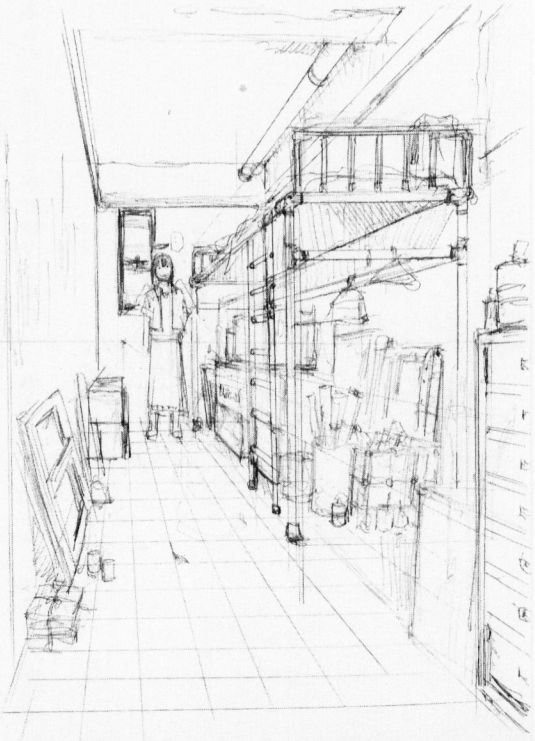
■レキがベッドから落ちたシーンのコンテに修正用カット。ここに元になったコンテを掲載する事ができないので、説明のしようがないけれどレキがベッドから落ちた時の状況に誤解があった。文章から意図が伝わらなかったようなので、コンテを修正しようとしたが、コンテで使われる専門用語や秒数の指定に自信がなかったので、結局、レキのアップ時の表情とベッドから落ちた時の状況の絵だけ切りとって説明した。

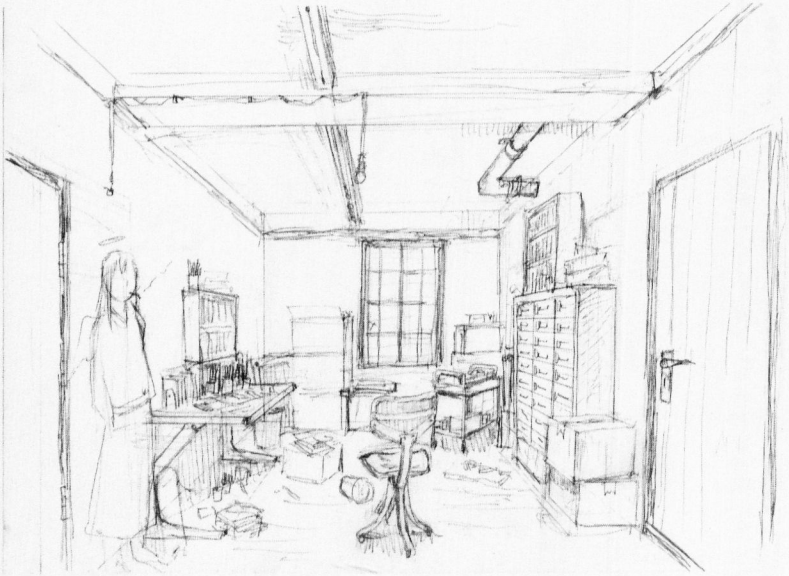


■レキの部屋の間取り。この部屋も変則的なつくりになっている。物置のような場所だったのかもしれない。

レキ、苦笑い
レキ「そりゃお騒がせ。……寝相が悪くてさ。また落ちた」
　無理に笑顔をつくるレキ。背中の羽をつまんで見せて
レキ「まったく、使えない羽だよな」
ラッカ「私の名前、レキのが似合ってるかも」
レキ「ちぇ」
　笑う二人。ラッカ、部屋を見回す。レキ、ラッカが何かいうより早く
レキ「ごめん、散らかってて。やっとアトリエに使える部屋を見つけたんだけど、ガラクタを運び出すのが大変でさ」
　レキ、机の上の散らかった画材の中からごそごそと煙草を見つけ出し、欠伸をかみ殺しながら一本くわえる。
ラッカ「絵を描いてるの？」
レキ「ああ、まあ、真似事だけ」
　レキ、大儀そうにどさっと椅子に座る。
ラッカ「見ていい？」
レキ「ダメダメ！描きかけだし、ろくなもんじゃないよ」
ラッカ「ふうん……。アトリエって、こっち？」
　ラッカ、もうひとつのドアを指さす。
レキ「駄目！」
ラッカ「えっ？」
　ラッカ、レキの強い制止に驚く。
レキ「そっちは、……ホントに散らかってるから」
ラッカ「……あ……ごめん」
レキ「いや」
　ラッカ、レキのテンションの低さに戸惑う。
ラッカ「そ、そうだ朝食。レキだけ来ないから、それで呼びに来たの」
レキ「ん……あとで食べる」
ラッカ「そう……。じゃ、私、行くね。灰羽連盟の寺院に呼ばれてるの」
レキ「寺院に？一人で？」
ラッカ「ううん、ヒカリが一緒に行ってくれるって」

▲言うなあ、ラッカ。





■レキの部屋の設定をつくるにあたって、『パリのアトリエ』という、いろいろなアトリエを集めた写真集をぱらぱらと見ながら内装や家具を考えた。結果的には地味で味気ない内装だけど、ホテルなどで使うキャスターのようなものを画材入れにしているのは、ちょっと気に入っている。僕も欲しい。

レキ「ああ……。じゃ、気をつけて」
ラッカ「うん」
ラッカ、部屋を出てドアをぱたんと閉める。
ぽつんと取り残されるレキの後姿。レキ、ぼーっと煙草をふかしながら、何の気なしに、床に転がっているバケツをつま先でつつく。がらん、と音を立てて転がるバケツ。
レキ「また、おんなじ夢……」

● オールドホームから町へ続く道。

文様の入った布にくるんだ光輪の鋳型を抱えているヒカリと、その隣にラッカとネム。並んで歩いている。
ヒカリ「……考えすぎよぉ」
明るくケラケラと笑うヒカリ。落ち込んでいるラッカ。
ラッカ「……でも、ノックもなしに部屋に入ったりしてさ、気を悪くしたのかも」
ヒカリ、吹き出してしまう。
ヒカリ「……レキに限ってそれはないって。今ラッカが住んでるゲストルームだって、もともとレキの部屋だったのをみんなで入り浸ってゲストルームにしちゃったんだから」
ラッカ「そうかなあ……」
ネム「レキは昔っから寝起き悪いのよね。眠りも浅いし。昔一緒の部屋に住んでた時、よくケンカしたっけ」
ラッカ「へえ……」
ヒカリ「あ、こっちこっち」
ヒカリ、まっすぐ歩いて行こうとするラッカを呼び止める。
ラッカ「え、寺院って、街にあるんじゃないの?」
ヒカリ「うーんと、街はずれの、もっとはずれって感じかな。近くに墓地があったりして、用がないと誰も近寄らないんだ」
ネム「じゃね。気をつけて」
街へ向かうネム。軽く手を振り、そのまま歩いてゆく。

4

▲ネムはさりげなく、過去の出来事をぼかして語っている。ヒカリが話している内容はおそらくネムからの伝聞で、間違ってはいないが、ゲストルームの由来など、レキの過去に関わる部分は、ネムが、話すべき事と話す必要のない事を上手に選り分けて伝えたのだと思われる。

手を振り返し脇道の方に向かうラッカとヒカリ。

●寺院への道

街に続く道と直角に交わる、細いわき道をゆく二人。道の右手に段差があり、だんだん高低差が広がる。やがて右手の段差は崖と言っていいほどの高低差になる。左手は風車の見える丘。

ヒカリ、ラッカの光輪を見上げる。

ヒカリ「ちゃんとくっついたね」

ラッカ「え？」

ヒカリ、自分の光輪を指さして見せる。

ヒカリ「これ、これ。くっつきが悪かったから、心配してたんだ」

ラッカ「あ、うん。でも今度はくっつきすぎちゃってさ」

言っているそばから髪が跳ね上がり、あわてて指でつまむラッカ。

ヒカリ、ちょっとラッカに顔を寄せ、匂いをかぐような仕草。

ラッカ「え？なに？」

ヒカリ「う、ううん、なんでもないなんでもない」

ヒカリ、明らかに狼狽した様子でぶるぶると首を振り、持っている光輪焼きをぎゅっと抱きしめる。ラッカ、それを見て

ラッカ「そうだ。ヒカリはどうして光輪の係になったの？」

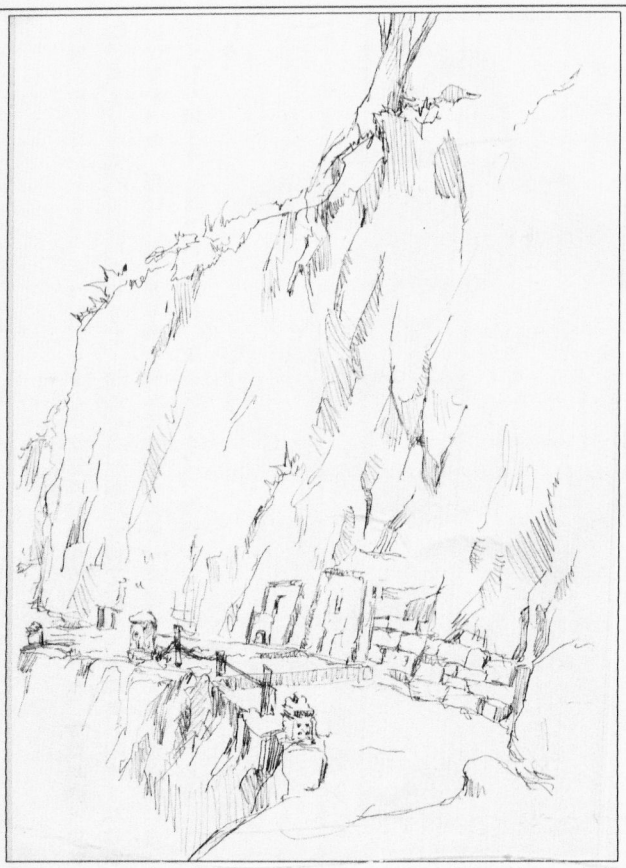
ヒカリ「ど、どうしてって、べつに……アハハ。あ、見えてきた」

たたた、と走り出すヒカリ。きょとんとするラッカ。

●寺院前

崖の斜面沿いに、階段がある。整備されたものではなく、

▲なんというか、光輪に対して全く『不思議なもの』という感覚を持っていない二人。



■寺院への道設定。寺院側から見た状態。美術設定後、海外（中国かな）に発注したら、指定した色と全然違う色で塗られてきてしまったらしく（そういう事は何度もあったようだ）、美術監督の片平さんが大変な思いをして直していた。

斜面の岩を削り出したような感じ。均等な段差ではなく、道になったり、突然階段になったり。崖下に転落しないように、道の側面には最低限の簡素な柵があるが、あぶなっかしい。

ヒカリ「気をつけてね」

ラッカ「う、うん……うわあ……」

崖下を覗こうとして、怖くて首をすくめるラッカ。崖の高さはビルの2〜3階くらい。壁の向こうが見えない程度。

崖の上から崖下に向かって、滝があり、危なっかしい吊り橋が架かっている。

ひょいひょいと進むヒカリと、立ち止まってしまうラッカ。ヒカリ、ついてこないラッカに気づき、振り返る。

ヒカリ「どうしたの?」

ラッカ「……う、うん」

尻込みするラッカ。

ヒカリ「大丈夫!ちょっと揺れるけど怖くないよー。ホラ」

ヒカリ、橋の真ん中で、バレエのようにくるくる回って見せる。とたんにバランスを崩し、橋から落ちかける。

ヒカリ「わっとっと」

ラッカ「わーっ!わーーっ!!」

真っ青になり、頭を抱えて叫ぶラッカ。ヒカリ、なんとか踏みとどまり、ラッカに向かってにっこり。

ヒカリ「……ね、怖くないでしょ……わっ。なに、なに?」

ヒカリ、全力で走ってきたラッカに腕をつかまれ、そのままラッカにひっぱられて吊り橋を越える。

ヒカリ「なんだ、怖くないんじゃない」

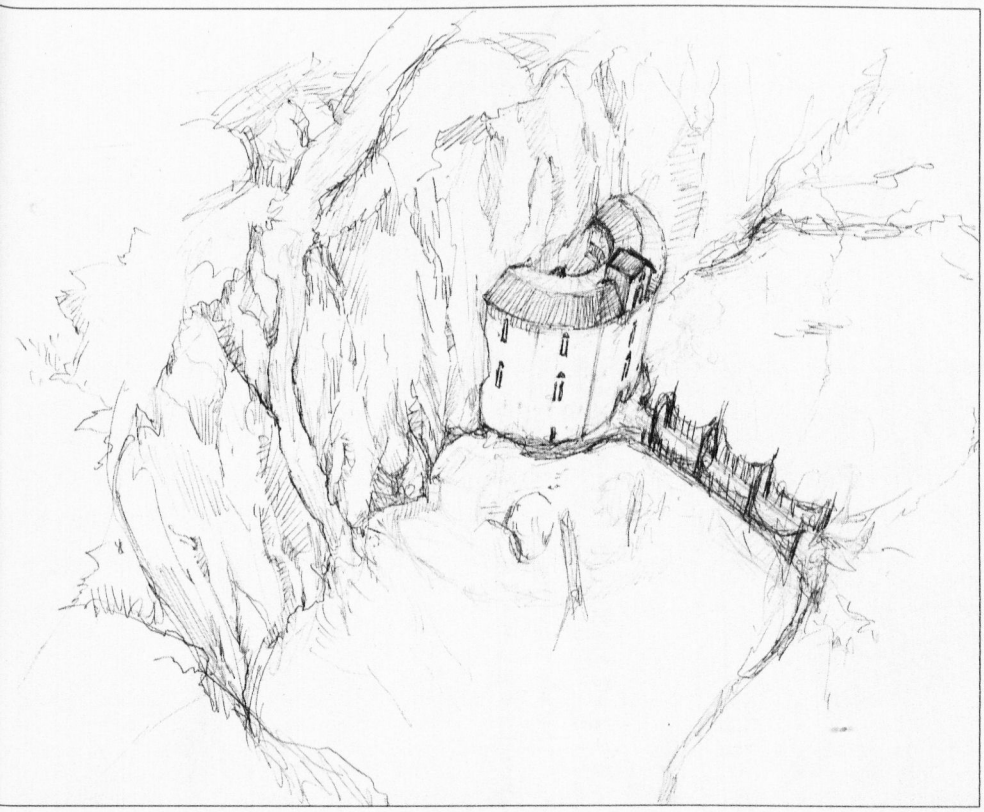
ラッカ「ひ、ヒカリを見てる方が怖いってば!」

ぜーぜー息をするラッカ。

● 寺院

寺院正面。背後は切り立った崖、周囲は湖。隠れ里のような雰囲気。

▲僕が考えていたより、かなりダイナミックな景観になってしまった。寺院に続く道に関しては、あまり日常的でないというか、類例のない場所なので、もっと緻密に設定を起こさないといけなかった。特に、滝と吊り橋に関しては僕の指示がほとんどなくて、結果的にちょっと大きくなり過ぎてしまった。逆に、道は狭すぎて、寺院にいくのに、大変な思いをしてしまっている。



■寺院、初期設定。決定稿とはだいぶ違っています。湖に囲まれていて、さらに橋を渡っていく設定でしたが、吊り橋の後にまた橋だと、見ている側が混乱するという事で、橋を無くし、周囲に畑を作ったりしました。

正面の扉は閉まっている。
ラッカとヒカリ、どうしたものかと、辺りをきょろきょろ伺う。少し離れたところにある背の低い植木が、がさがさと動き、ぬっと長衣姿の人影が起き上がる。
草むしりをしていたらしく見える。ものものしい長衣と軍手に鎌のいでたちがアンバランスで滑稽にもみえる。
ヒカリ、唇に人さに指を当てて、ラッカに『喋るな』と伝える。ラッカ、小声で
ラッカ「昨日見た話師の人？」
ヒカリ「違う。いいって言うまで喋っちゃ駄目よ」
ラッカ、うなずく。長衣の男（以下、連盟員と表記）、懐から飾り紐のついた鳴子のようなものを出し、ラッカとヒカリの両腕と、羽につける。鳴子は金属板のようなもので、両手を合わせて縦に揺すると、両手首から下がった金属板がアメリカンクラッカーのように打ち合わされる仕組み。羽に付けられた鳴子は、馬の鞍のようなものから、それぞれ2枚の金属板が下げられている。
ヒカリ、連盟員に光輪の鋳型を差し出す。連盟員、首を振り、ゆっくりした動作で扉を指さす。
ヒカリ、両手を組んで胸の高さに掲げ、ゆする。鳴子がちりん、と澄んだ音を立てる。連盟員、うなずく。
ヒカリ、扉に向かう。ラッカ、おっかなびっくり、見様見まねでヒカリと同じように手の鳴子を鳴らし、慌ててヒカリの後を追う。

● 扉の前

ぱたぱたと走ってくるラッカ。扉の前で待っていたヒカリに追いつく。ヒカリ、小声で
ヒカリ「ごめん。言うの忘れてた。私たちは中では話しちゃ駄目なの。（手の鳴子を鳴らし）これが挨拶で、（右の羽の鈴を鳴らし）これが『はい』で、（左の羽の鳴子を鳴らし）これが『いいえ』。話ができるのは話師だけだから、とりあえず話師を捜そう」

▲こんなのがいきなり現れたら怖いですね。本当は、草むしりをしていて、その草の影から立ち上がる、というシーンだったのですが、その動作が入らず、アニメ本編では唐突に現れたように見えてしまいました。寺院も、ちょっと形が違い過ぎるというか……。初登場のシーンなので、もう少しきちんとチェックできれば良かった。1話は監督、2話は助監督のコンテという事で、自分の意図が細かく説明しなくても伝わったので、ちょっと油断があった気がします。

▲一番大切な事を言い忘れている。さすがだ。

どの鳴子もちょっとずつ音が違う。ラッカ、自分の羽をちらっと見る。自信がなさそう。

●寺院の中

寺院自体は、ドーナツを積み重ねたように、中央に丸い庭があり、周囲を円形の建物が取り巻いている。庭は植物が生い茂っていて、庭園のよう。二人がドアを開け、中にはいると、左右にドアが、前方に庭園が見える。どこに行けばいいのか分からず、きょろきょろする二人。突然どこからか声が響く。声は周囲の壁に反響して深いエコーがかかる。

話師「灰羽だな。何用で来た?」

とっさに口を開こうとするラッカ。その口を慌てて塞ぐヒカリ。

話師「……一人は光輪の鋳型を返しに来た。もう一人は私が呼んだ新生子だ。……そうだな?」

ヒカリ、ぴょこっと右の羽を鳴らす。ラッカはおろおろしているだけ。

話師「……庭園の中へ」

二人、顔を見合わせ、歩き出す。鳴子を鳴らさないように気をつけながらそろそろと庭園を進むと、中央に東屋があり、話師が立っている。両手の鳴子を鳴らす二人。うなずく話師。

話師「まず鋳型をこちらへ」

ヒカリ、鋳型を差し出す。

話師「新生子、名はなんという?」

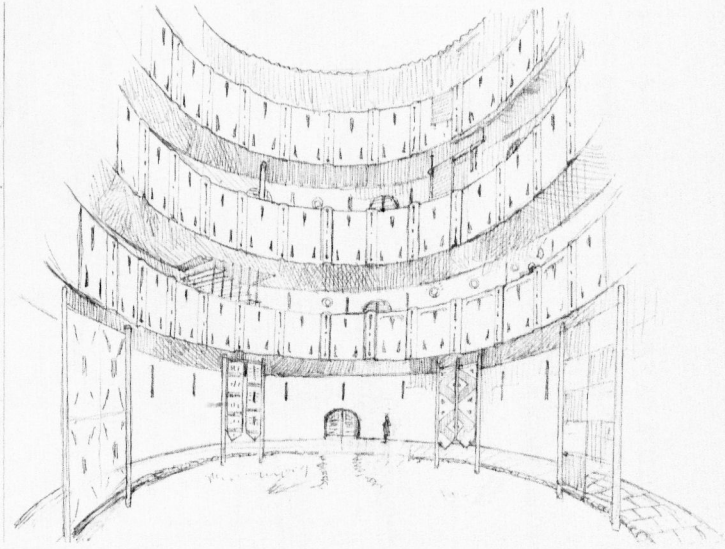
ラッカ、どうしていいか分からず、ヒカリと話師を交互にを見る。

話師「名前はラッカ。……そうだな?」

ラッカ、驚き、それから慌てて羽を揺らす。だが、両方動いてしまい、鳴子は不協和音のように響く。『あちゃあ』という顔のヒカリ。真っ赤になるラッカ。目を閉じ、精神を集中して、なんとか不格好に右の羽だけを鳴らす。

▲この場面での話師は、審問をして、答えを得る前に、まるで心を読んで答えを知ったかのような話し方をしている。これは超能力というような話ではなく、そういう話し方の技術、と考えるべきだと思う。周囲の壁に声が反響して、威圧的に聞こえたりするのも同様の理由ではないかと思われる。

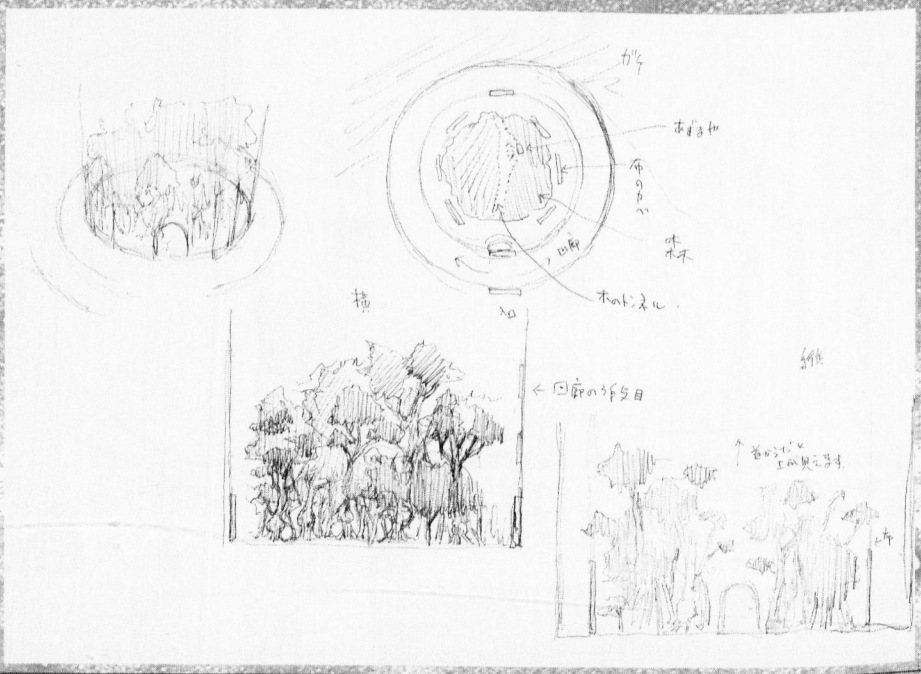
話師は、カルロス・カスタネダの本に出てくるインディアンの呪術師ドン・ファンと、マイク・レズニック著『キリンヤガ』のコリバが少しだけモデルになっている。



■寺院内部。寺院自体は、中国の福建省にある客家円楼を参考にした。といっても、外観のみの小さなモノクロ写真しか資料がなく、それを元に想像を膨らませたという程度の事だが。内部は箱庭というか、鬱蒼と樹の生えた庭園になっている。

■四阿設定。シナリオを書いている時、FEPが四阿（あずまや）と普通に変換してくれたので、そのまま四阿と表記したら、誰も読めなかった。考えてみたら、僕も読めない。見取り図はつけたのだが、正面からの図しか描かなかったせいか、作中でも正面の構図で使われてしまった。きちんと構図を組んで描かないといけない。

■寺院の見取り図。地図は、略し過ぎて良く分からないですね。回廊、と矢印の振ってある場所は、回廊の外側にドアと部屋があります。



■寺院の中から見た状態、を、冗談ぼく描いたのだが、もろに作中に使われてしまった。しかもラッカのアホ顔もそのままに！実際は、ラッカの目の前にはもっと鬱蒼と樹が生えています。

■右は鳴子初期案。カラカラ鳴る部分が見えた方がいいだろうという事で、見えるデザインにしたが、作画の手間と、小さくて分からないと言うことで、鈴型になった。

話師「羽がきちんと体の一部になるように心がけなさい。それがやがて来る巣立ちの日への備えとなる」
ラッカ、話師を見上げ、何か言おうとするが喋れず、結局口をつぐむ。
話師「巣立ちの日については、後で他の灰羽に聞きなさい。……さて、同志ラッカよ。我々は今日よりお前を同志として迎える。これがその証となる」
話師、灰羽手帳をラッカに渡す。
話師「それがお前の日々の暮らしの保証となる。引き換えにお前はこの街で働く。自分のため、自分たちの住み処のため、幼い同志のため、お前は良い灰羽であらねばならない。……我々はここにいる。困った事があったら来なさい。……他に何かあるか?」
ヒカリとラッカ、左の羽を鳴らす。ラッカ、今度はうまくいく。
話師「よろしい。では下がりなさい」
ヒカリとラッカ、両手の鳴子をしゃん、と鳴らす。

● 帰り道。

ヒカリ「ああ、肩凝っちゃったねえ」
朗らかにいうヒカリ。ラッカ、非難するように
ラッカ「ひどいよー。最初に言ってくれればさ、いろいろ心の準備がさ……」
ヒカリ「ごめん、ついうっかり。でも、ぶっつけ本番のおかげで、羽、動かせるようになったじゃない。ね」
ごまかし笑いするヒカリ。
ラッカ「もう……」
ラッカ、ふと丘の方を見る。遥か向こうに小さな人影がちらりと見え、すぐに丘の向こう側に消える。
ラッカ「……あ、クウだ。(大きな声で)クウ!」
ヒカリ「え?」
ラッカ「今、クウがいたの。(指を差して)あの風車の脇。あれ、聞こえなかったのかな……」

▲もう少しものものしい儀式でもよかったかなとも思ったが、つくり過ぎると逆にリアリティがないと思い、こういう形にした。今読み返すと、初めて一人暮らしをして、区役所で住民票を移した時の事を少し意識していた気がする。

▲完璧なうっかり、そしてポジティブシンキング。物語後半は、トーンが暗くなりがちだったが、ヒカリのこういう性格にずいぶん救われた。

▲このシーン、後々の伏線だが、分かりづらいので入れようか迷った。

ヒカリ「そうじゃない？あの風車、発電機なんだって。風の丘は天気のいい日は気持ちいいんだけど、あれがうるさくて」
ラッカ「そうなんだ……」
　街とオールドホームを繋ぐ川沿いの道にさしかかる。
ヒカリ「私このまま街のパン屋に仕事に行かなきゃ。ラッカはどうする？」
　ラッカ、しばし考え
ラッカ「わたし、いったんオールドホームに戻る。レキに会わなきゃ」
ヒカリ「気にしすぎだよー」
ラッカ「うん、でも……」
ヒカリ「そっか。じゃあ、また夕方ね」
ラッカ「うん。ありがと」

●オールドホーム

　門の前の橋を渡るところ。数人の子供たちがわーっと走ってくる。門の方からレキの声が聞こえる。
レキ「こらーっ！まだ昼ご飯済んでないでしょーが！」
　ラッカ、走り出す。レキ、門の前で仁王立ち。エプロン姿。フライパンと、フライ返し（目玉焼きをひっくり返すヘラのようなやつです）を持っている。
ラッカ「レキ！」
レキ「あ、早かったじゃない。用事は無事済んだ？」
ラッカ「うん。あの……」
　レキ、ラッカと並び、オールドホームに向かって歩く。
レキ「ヒカリがまたなんかポカするんじゃないかって心配してたんだ。取り越し苦労で良かった。話師に会った？」
ラッカ「うん。羽がちゃんと動かせなくて、おこられちゃった」
レキ「あー。ほっとけほっとけ。あーゆー年寄りは説教する以外ヒマの潰し方を知らないんだ」
ラッカ「レキ、あのさ……」
レキ「ん？」
　煙草をくわえたレキ。いつものどこか飄々とした雰囲気のある笑顔。

▲この時は、レキと話師の関係について、ディテールは決まっていなかったと思う。ただ漠然とレキは話師に反感を持っていると考えた。

■レキのエプロン。これくらいの重要度の低いデザインは、誰かに任せてしまっても大丈夫なのだが、この時は、これにしたくて、速攻でラフを描いて魚印のエプロンにしてもらった。といっても、何か特別なこだわりがあったわけではなく、どこかの雑貨屋で見かけたエプロンなんだけど。

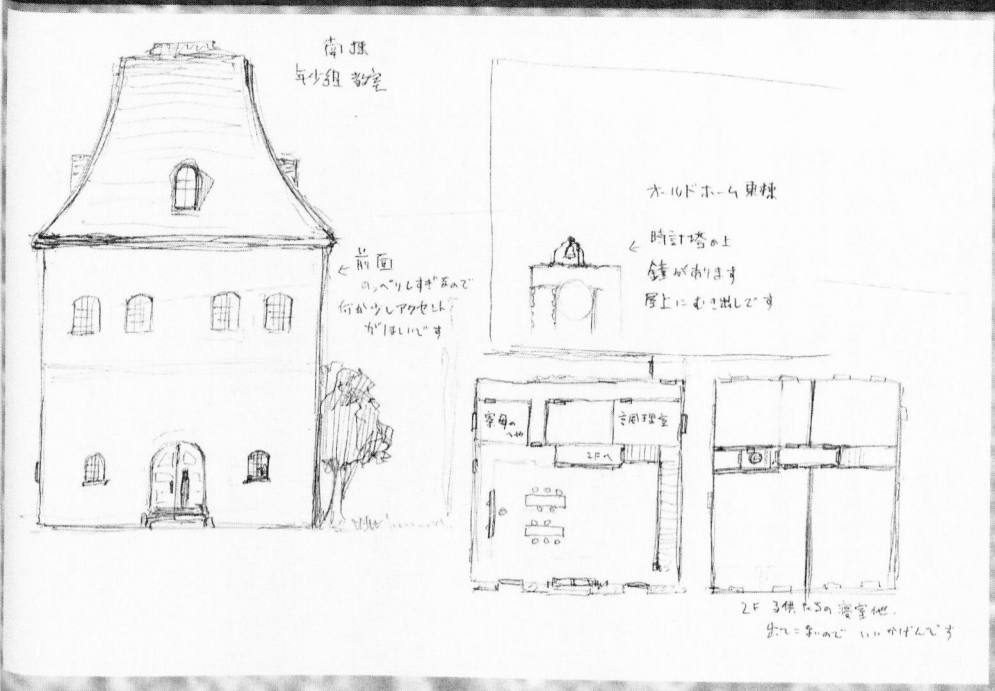
ラッカ「いいや、なんでもない」
　微笑むラッカ。けげんそうなレキ。
レキ「？」
　ラッカ、レキのフライパンを見て
ラッカ「いつも子供たちのご飯、つくってるの？」
レキ「あー、買ってくる事もあるし、私と寮母のばあさんと、あとはネムとかヒカリが手の空いた時にふらっと手伝いに来てくれたりくれなかったり」
ラッカ「大変だね」
レキ「仕事だからね。ったく、チビ共は人の苦労も知らないで。寮母のばあさんが、オムレツの付け合わせにニンジン出したせいで、脱走者が続出だよ」
　ラッカ、笑う。
ラッカ「私も手伝うよ。灰羽は働かなきゃ駄目なんでしょ」
レキ「ああ。そうだね。灰羽が働ける場所ってのは決まってるからさ、うちらの仕事場をひとつずつ見学して、自分に向いた仕事を見つけたらいいよ」

● 年少組

　南棟の1階が年少組の教室。子供は10人くらい。御神体のない小さな教会のような風情だが、子供たちの描いた絵やらなにやらと、並んだ長机のせいで、厳かな雰囲気はみじんもない。
　上座？に座っている寮母。しかめっ面。レキとラッカが入ってくるなり
寮母「遅い！チビ共は？」
レキ「逃げられた。あとでとっちめてやる」
　レキ、ニンジンを残している数人の子供の机の前で腰に手を当て
レキ「まーだやってる。なんでニンジン食べれないのさ」
男の子A（ショータ）「だってにがいじゃん」
男の子B（ダイ）「にがーい」

▲ちょっとセリフが冗長だった。アフレコの時はそれほど違和感を感じなかったが、テレビ放映時に気づいた。まだ文字のセリフと声に出すセリフの使い分けができない。

■寮母設定。この前に、ボールペンでざっと描いたやつがあって、それを上田プロデューサーに見せたら『悪人ヅラ！怖過ぎる』と言われ、僕としては相当柔和にしたつもりだが、まだ『魔女か！人相悪過ぎる！』と散々だった。そんなに怖くないと思うのだが……。



■南棟外観設定と見取り図。この2階で年小組は寝泊まりしている。寮母はここで寝る時もあるし、街にある家に戻る時もある。
下は内部の設定。幼稚園の教室のようなイメージ。アニメ本編では、年小組の描いた絵がたくさん貼られていた。そういうの描くのって案外大変だったりする。設定された方（誰だろう？）ご苦労様です。

レキ「ちぇっ。こーゆーときだけ結託しやがって」
寮母、ぬっと立ち上がり、レキに向かって
寮母「こういう時は、まず先生が見本を見せるもんだ」
寮母、ぬっとレキに皿を差し出す。大きなニンジンの固まりが載っている。レキ、げっ、という顔で皿を受け取り
レキ「えー……ラッカ、まかせた」
レキ、素早くラッカに皿を押しつける。ラッカ、びっくりして反射的に皿を受け取る。
ラッカ「え?」
レキ「今回は特別に、ここにいるラッカ先生がお手本を見せるから、よーく見ておくように」
ぽん、とラッカの肩を叩くレキ。
ラッカ「え?え?」

●教室

ラッカ。ニンジン嫌いの子供たちに挟まれる形で席に着いている。
机の上に、ニンジンの盛られた3枚の皿。ニンジンは大きめの輪切りで、油で炒めた感じ。ラッカの皿のニンジンは、厚みが子供たちの3倍くらいある。子供たち、ニンジンのでかさに「おーっ」とうなる。
ラッカ「……これ、食べればいいの?」
レキ、ラッカの背後に立ち、フライ返しで口元を隠してごにょごにょと
レキ「そ。なるべくうまそうにね」
ラッカ「レキ、自分で食べたら……」
レキ「ホラ、初仕事、初仕事」
ラッカ「うー……」
ラッカ、神妙な顔で、ニンジンをぽりぽりもぐもぐと食べる。
レキ「にこやかに!(ごにょごにょと)」
ラッカ「……うん、おいしいおいしい」

▲なんかほのぼのした話を一話やろうと思ったんだけど、行き過ぎたかなあ。

▲ハンバーグのようなものにニンジンが添えられているイメージだったが、大皿に山盛りのニンジンという、ニンジン地獄のような絵になってしまった。そりゃ脱走者もでるって。

ラッカ、しらじらしい演技。でも子供には受けている。
男の子A「すっげー」
子供たち、拍手。照れるラッカ。
レキ「はい、やっぱり年長組はすごいね。さて今度はお前らの番！」
女の子A（ハナ）「……ふえーん」
子供たちがしぶしぶニンジンを食べ始める中、ラッカの右隣の女の子が手を付けられずにべそをかいている。レキ、そのこの前にかがんで
レキ「ほーら、ちゃんと食べないと大きくなれないぞー」
ハナ「いいもん」
レキ、机の下に身を隠して、頭だけぬ～っとだしてハナを睨み
レキ「ニンジン残す悪い子の所には、夜中にでっか～いでっか～いニンジンおばけが来ちゃうぞ～」
女の子A「やー」
ハナ、ラッカの背中に隠れる。ふと、ラッカの髪に顔を押しつけて
ハナ「ケーキの匂いがする」
レキ「コラ！現実逃避すんな」
ハナ「うそじゃないもん」
レキ「どれ」
レキも、ラッカに顔を近づける。
レキ「しないよー」
ハナ「するもん。パンケーキだもん」
ショータ「あーっほんとだ！パンケーキくいてーー」
ダイ「ケーキケーキ！！」
子供たちにしがみつかれ、置き物のように固まっているラッカ。他の子供たちにも飛び火して、部屋中ケーキの大合唱。お手上げ、という感じのレキ。
レキ「ばあさん、どうする？」
寮母、すっくと立ち上がり、子供たちの前に行き、杖で床をドンと突き、一同をぎろりと見渡す。一瞬静まり返る教室。寮母のおなかがぐーと鳴る。こける一同。
寮母「……オホン。あー、昼ご飯を残さず食べた者だけ、おやつ

▲レキ、テンション高い。

▲このあたりのやりとり、少し崩した感じにしたいと思いつつ、[Ma]の時のような飛び過ぎたギャグにする事もできず、ちょっと中途半端になってしまった。

ウがガイドするよ！」

●川沿いの道

自転車に二人乗りするクウとラッカ。ラッカが運転、クウが後ろに立ち乗り。

ラッカ「朝、風の丘を歩いてたでしょ」

クウ「（ちょっとびっくりして）えっ……うん。えっと、街にこれ買いに行ったんだ（片手で帽子を押さえ）」

ラッカ「へえ。似合うよ」

クウ、ちょっと照れくさそうに笑い、羽をぱっと広げる。

クウ「ばさばさばさばさー。ぽんこつ自転車号、離陸しまーす」

ラッカ、吹き出す。

ラッカ「ほんとに飛べたらいいのにね」

クウ「飛べるよ」

ラッカ「えっ？」

クウ「信じていれば、いつか必ず飛べるよ。クウはそう信じてるんだー」

ラッカ「うん……そうかもね」

●街

ラッカ、自転車から降り、クウと並んで歩道を歩く。はしゃぐクウ。

クウ「ガイド、ガイド」

散々寄り道しながら、得意げに街を案内するクウ。ピントのぼけたガイドぶり。苦笑するラッカ。

クウ「あのネコはね、雑貨屋の飼い猫でひとなつこいの。で、あっちのブチはノラで性悪」

見た事もない細い路地。増改築を繰り返したような複雑な住居の間を縫うように、急な階段が続いている。階段の脇に細い歩道があるので何とか自転車を押してゆけるが、ラッカ、ちょっと不安げ。

ラッカ「クウ、ホントにこっちでいいの？」

▲カナが聞いたらぶん殴ってしまいそうだ。

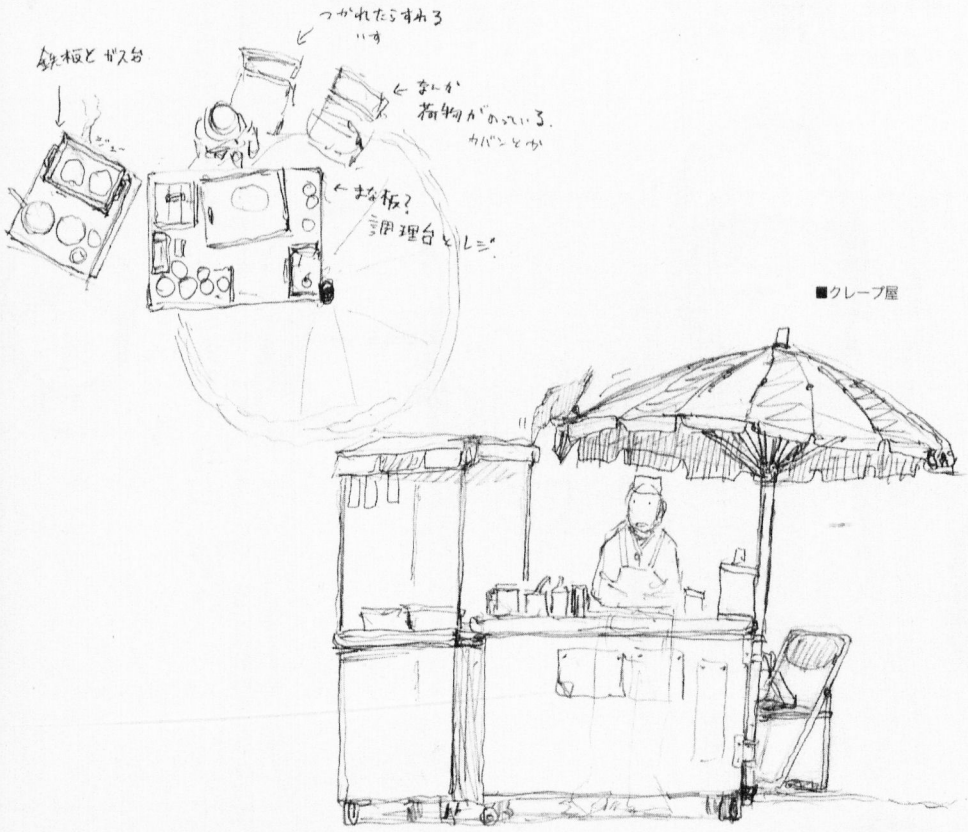
■クウ、帽子設定。帽子がちゃんとかぶれないというのは、昔描いた同人誌のふたコマ漫画のネタ。

クウ「もっちろーん。あ、あそこの映画館のポスターはね、いつもでたらめなの。お店の人がめんどくさがりなんだね」
路地の両わきの家を繋ぐアーチを抜けると、メインストリート。ほっとするラッカ。
クウ「こないだあそこのカフェで掃除の手伝いして、角砂糖もらったんだー」
ラッカ、感心して
ラッカ「クウも働いてるんだ。えらいね」
よろこぶクウ。満面の笑顔。
クウ「えへへへへー。だって、ラッカが来たからあたしもう先輩だもんね」
うなずくラッカ。クウ、ちょっと上目遣いにラッカを見上げ
クウ「あたしね、年長組で一番チビだから、ええと、おこんないでね。ほんとはラッカが妹みたいだといいなと思ったんだ。ええと、でもね、考えたらあたしよりチビだったら年少組にいっちゃうから、だからラッカはあたしより大きくて良かったんだ。だって一緒にいられるもんね」
ラッカ「ほんとにそうだね。私もクウみたいな先輩がいて良かった」
クウ、嬉しくてじっとしていられないという感じで、羽をぴょこぴょこさせながら走り出してしまう。微笑むラッカ。

屋台のクレープ屋の脇を通りすぎる二人。屋根の上からクレープを狙っているカラスに気づき、店員が手を振って追い払おうとしている。何気ない光景。

クウ「カナはカラスのこと、ゴミあさりっていうんだよね。でもあたしはカラスは私たちと友達になりたいんだと思う」
ラッカ「えっ？」
クウ「あたしたちにはゴミでも、カラスにとっては食べ物なんだよね。だから、友達になって分けてもらいたいんだと思う。あたしは灰羽で言葉がしゃべれるからカフェのおじさんと友達になって、角砂糖がもらえたよ。でもカラスはカアカアしか

▲このセリフは本編では尺が足りなくてカットされてしまった。グリの街にも映画館はちゃんとあります。街で映画をつくっている物好きな人達もいますし、街の外から、本などと同じようにフィルムが入ってくる事もあります。それらはモノクロで、音声の入っていないものばかりです。



言えないし真っ黒で怖い顔してるから、クレープはもらえないし、カナに箒で追っかけられるんだ。なんか不公平」
クレープを諦め、飛び去るカラス。やれやれといった顔の店員。
クウ「カラスと話ができたらいいのにね」
というクウ。うなずくラッカ。（あまり沈んだ空気にならないように注意）

●街。パン屋付近

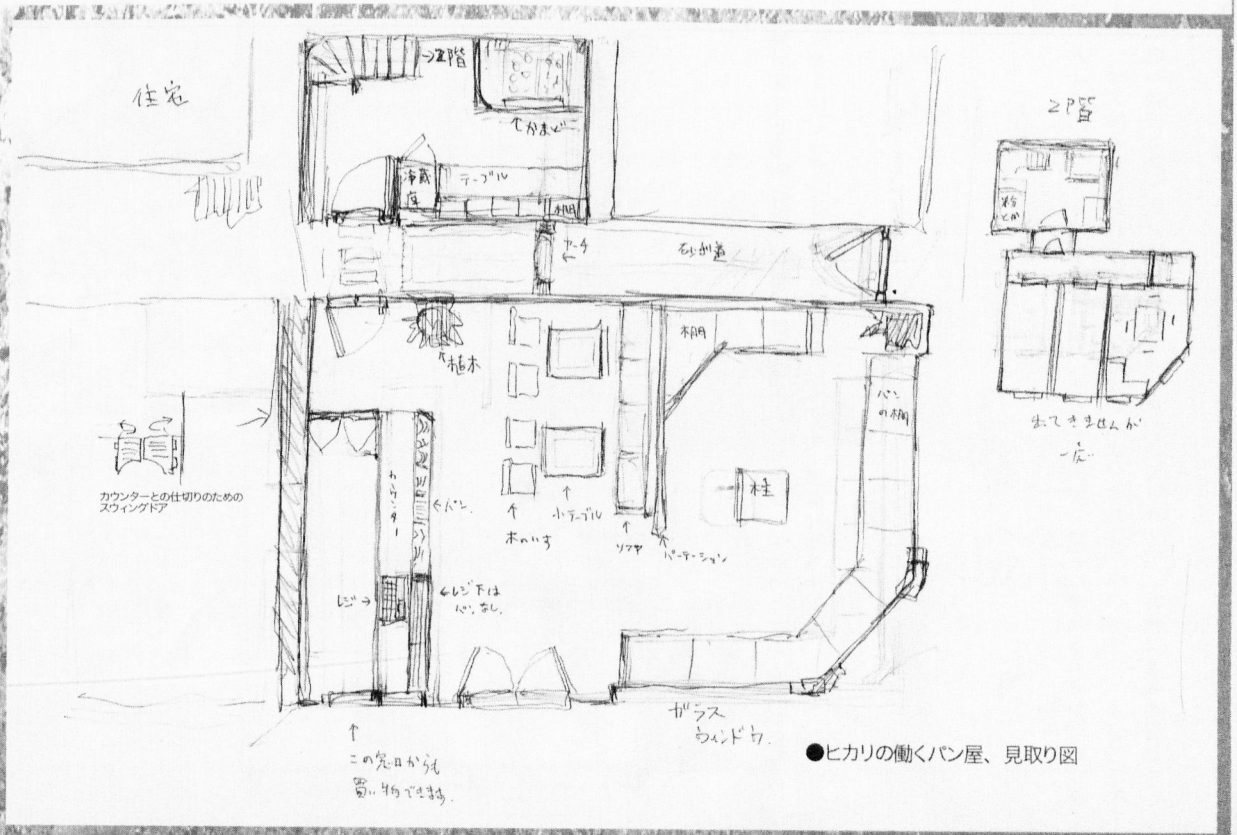
街の中央広場の少し手前にあるヒカリのパン屋。古びた店構えが遠くに見えてくる。
クウ「ヒカリが働いてるパン屋さんはねえ、グリの街でたったひとつの灰羽が働けるパン屋なんだって」
ラッカ「へえ……。じゃあ、なんか格式のある、特別な店なんだ」
クウ「ううん。街で一番古ぼけてる店ってこと」
ラッカ、こける。

●パン屋。店内

古いが、わりと広い店内。軽食をとるためのテーブルスペースもある。店の外にたばこ屋のようなカウンターがあり、簡単なものは店に入らなくても店頭で買い物できるようになっている。
店は午後に入って、混雑が一段落した所という感じ。ヒカリの姿はない。
ラッカとクウ、ヒカリを探してきょろきょろしていると、レジのおばさんが声をかけてくる。
おばさん「ああ、ヒカリの友達かい？ヒカリなら厨房の方にいるよ、そっちから回っておいで」
ラッカとクウ、言われた通りにカウンターの中に入り、その奥の厨房へ。

■ザ・脇役といった感じのクレープ屋のおじさん。よく見るとエプロンに何か描いてある。『Creprie』とかなんとか。店名だと思うが、よく憶えていない。

▲一応、灰羽が働ける建物には、連盟の許可証のようなプレートがついている。助監督の大森さんが設定をつくってくれた。古着屋のシーンで、戸口に張ってある。

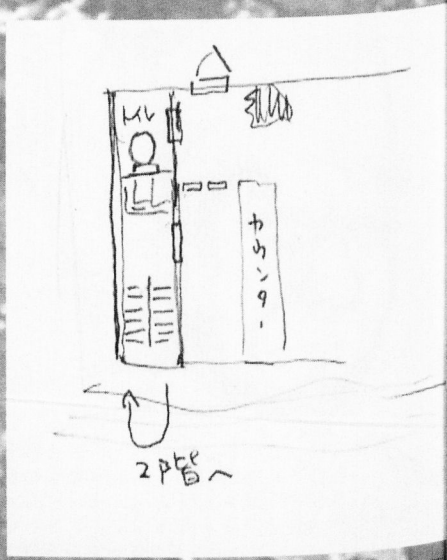


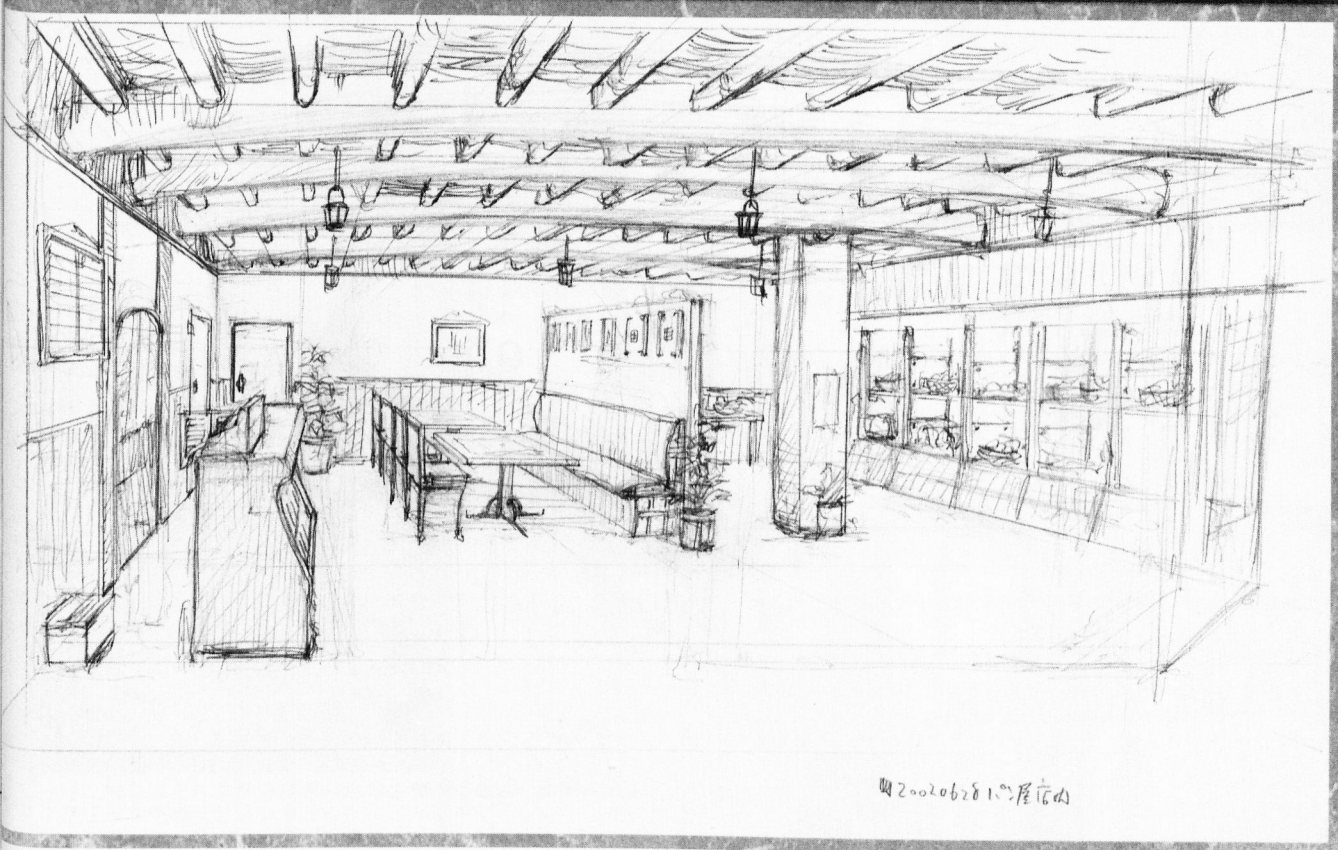
●ヒカリの働くパン屋、見取り図

■ 20020628 パン屋カラ.

■右はパン屋外観と中の見取り図。ハーフチェンバーと呼ばれる、柱が外から見えるような構造。古い感じがして、でもきれいな建物にしたかった。店内は、ちょっと食事ができるスペースがあり、窓際が陳列棚になっている。かまどは店内にはなく、左図のような細い路地を挟んだ奥の建物になっている。もしかしたら、元々はパン屋ではなく、あとから隣接した建物にかまどをつくったのかもしれない。わざわざ2階まで設定したけど、パン屋自体一瞬しか出てこなかった。

下図は、見取り図の補足。飲食スペースがあるならトイレがあった方がいいと思い、追加した。




2002.06.28 ハ屋内

●厨房

厨房の入り口から中をのぞくラッカとクウ。
パンを焼くためのかまどがあり、店長らしき大柄な男と、若い従業員、ヒカリがいる。かまどからパンの載ったスチールの盆をとり出す従業員。その盆をヒカリに渡す。
ヒカリ、相変わらず危なっかしい手つきで、それでもちょこまかとよく働いている。
次々と渡されるパンを、手際よく商品展示用のバスケットに詰めてゆく。

従業員「クロワッサン、上がりー」
ヒカリ「はーい」
従業員「ベーコンロール、上がりー」
ヒカリ「はーい」
といったやり取りを、物陰からテニスの試合を観るように目で追うラッカとクウ。
クウ「……すごーい」
ラッカ「……話しかけられん」
不意に、視界が影になる。見上げると、大柄な店長がにーっと笑って二人を見下ろしている。
店長「あーヒカリの友達かね」
ラッカ「はっはい」
店長「おうい！友達が来とるぞ」
ヒカリ、両手いっぱいにバスケットを抱えて出てくる。
ヒカリ「あれえ？」
ラッカ「パン買いに来たの。子供たちのおやつ」
ヒカリ「へえ。いいよ、どれでも選んで」
ヒカリ、ぱたぱたと走っていって、商品棚にバスケットを収める。
ヒカリ「（近くの客に向かって）こちら焼きたてになっておりまーす」
ラッカ「大変だね」
ヒカリ「（手を休めず）ううん、私なんか。店の人は朝の3時から働いてるのよ。一日中立ち仕事だし。私は店番と、こんな仕

▲ヒカリのちゃんとしているシーン。

▲このシーンを書くために、パン屋について少しだけど調べた。店にもよると思うけど、パン屋が豆腐屋並に早朝から働いていると知ってちょっと驚いた。考えてみればイーストを発酵させたり、いろいろ製造過程があるので当たり前なんだけど。

▲おっと数字が半角になっている。今回の脚本集は、決定稿を完全にそのままの形で掲載する事にしているので、このあといくつかある間違いも含めて、このままにしておきます。見苦しくてすみません。

■右図は、店内設定とパン屋主人、おかみさん。上は店員。パンを焼いてヒカリに渡していた。パン屋は、外観も店内の雰囲気も気に入っている。パン屋の面々も風体から性格が伝わる感じ描けたかなと思う。この頃は、まだシナリオのスケジュールに余裕があって、設定に時間がかけられた。このすぐ後くらいから、アニメのコンテが上がり出し、足りない設定が具体的にリストアップされてきて、大変な事になる。描き起こさなくてはならない設定のリストが100項目以上あった時には胃が縮み上がった。

事くらいだから」

店長「なーに、そんなに謙遜したもんでもねえだろ」

店長にこにこしながら、大きなワッフルプレートのようなものを持って厨房から出てくる。プレートにはフタがあり、それをぱかっと開けると、中は厚みを薄くした光輪の鋳型のリングの部分が4つあるような感じ。『88』に取っ手がついたような形。リング状のパンケーキが4つできている。

店長「これはヒカリのアイデアでつくったもんだ。熱いから気をつけてな」

店長、ヒカリ、クウ、ラッカに一枚ずつパンケーキを渡す。

ラッカ「あ、ありがとうございます」

クウ「ヒカリ、すごいじゃーん」

ヒカリ「へへ……」

店長、去り際に

店長「こないだヒカリが面白いフライパン持ってきていろいろ試してたなあ……」

ラッカ、はっとして，慌てて自分の光輪をむぎゅっとつまみ、顔の前に持ってきて匂いをかぐ。ガーンという顔になり、光輪をつまんでいた手が緩む。びょょんともとの位置に戻る光輪。

ラッカ「ヒカリ……まさか……」

ヒカリ「アハハ……ばれた？」

こそこそ逃げようとするヒカリにクウが能天気に

クウ「どうりで自分からワッカ係に立候補したわけだ。ヒカリ、あったまいー」

ラッカ「ヒ～カ～リ～」

ヒカリ「だって～。あれ見たらすっごいやってみたくなっちゃって」

ラッカ「ほんとにやる人はいないわよ！」

ヒカリ「ちゃんと洗ったのよ～」

ラッカ「そーゆー問題じゃな～い！！」

●オールドホーム、南棟

▲この『88』型プレートは、アニメのスタッフの方で設定を起こしてもらった。『88』に把手をつけた形、という説明でわりとちゃんと伝わった。ただ、僕はお菓子の作り方に関して全く知識がないので、こういうプレートでこういうパンケーキがちゃんとできるのか自信がないです。

▲全くだ。しかし自分で書いておいてなんだけど、こんなオチとは……。

昼下がり。オールドホーム。嬉しそうにパンケーキを食べる子供たち。
レキ、ため息。
レキ「次はニンジンケーキでもつくったろか」
寮母、いつのまにかレキの背後にいる。
寮母「お前だってニンジン喰えんくせに」
レキ「（ギクッ！）……わ、私は眼ぇつぶれば喰えるんだって！」
寮母「そういうのは喰えるとはいわん！まったくお前は背ェだけ伸びて、中身は全然かわらんな」
レキ「（苦笑して）ちぇ。今日のニンジンはチビ共じゃなくて私に説教するためか」
寮母「フフン。……まあ、脱走せんだけ成長したか」
レキ「当たり前だっての」
レキ、苦笑いしながら、ふと真顔になる。遠くを見る目。
レキ「……」

●ゲストルーム

夜。ゲストルームでも一同がヒカリのアイデア商品？の試食をしている。
ヒカリ「……でね、店で出す時は2枚重ねて真ん中にイチゴとホイップクリームをね……」
ネム「へー。いいじゃない」
クウ「ラッカー。早くしないとなくなっちゃうよー」
クウ、持っていたパンケーキをほおばりながら、もう一つに手を伸ばそうとして、それをカナに先に取られ、口をもごもごさせながら、カナとパンケーキの取り合いをする。

●洗面所

しゃかしゃかと髪、というかわっかを洗うラッカ。ドアの向こうからヒカリの声。

▲レキのニンジン嫌いについて、もし余裕があれば、レキの過去の話の中ででも1エピソードつくろうと思って少しだけ強めておいた。でも後半はそんな余裕もなく、話のトーンも重くなっていったので、伏線としては活きなかった。この会話からすると、寮母のばあさんは、3～4年前から手伝いに来てくれている、という感じだろうか。

▲ミスドか！

ヒカリ「ラッカ〜。ごめんね〜」
ラッカ「いいよ、もう……」
濡れた髪の毛をなでつけるラッカ。でもやっぱり髪の毛がふよん、とはねる。がくっと肩を落とすラッカ。

原稿用紙二百字詰め82枚（表紙含まず）

▲結局、ラッカのくせっ毛というか、光輪のみ静電気体質は、生まれつきのものなのか、ヒカリが光輪焼きでパンケーキを作ったからなのか不明。もし後者なら、今後グリの街はくせっ毛の灰羽で溢れかえる事になりそうだ。

▲3話は、ペラ82枚と言う事で、ちょっとオーバー気味。65枚なら余裕、70枚から75枚くらいまでは許容範囲、と言われていた。このあたりからキャラクターが僕の手を離れてどんどんしゃべり出し、だんだん紙数が守れなくなってくる。

おまけ　NGシーン

話師「……庭園の中へ」

二人、顔を見合わせ、歩き出す。鈴を鳴らさないように気をつけながらそろそろと庭園を進むと、中央に東屋があり、話師が立っている。両手の鈴を鳴らす二人。うなずく話師。

話師「まず鋳型をこちらへ」

ヒカリ、鋳型を差し出す。

話師「新生子、名はなんという？」

ラッカ、どうしていいか分からず、ヒカリと話師を交互にを見る。

話師「名前はラッカ。……そうだな？」

ラッカ、驚き、それから慌てて羽を揺らす。だが、両方動いてしまい、鈴は不協和音のように響く。『あちゃあ』という顔のヒカリ。真っ赤になるラッカ。目を閉じ、精神を集中して、なんとか不格好に右の羽だけを鳴らす。

話師「羽がきちんと体の一部になるように心がけなさい。それがやがて来る巣立ちの日への備えとなる」

ラッカ、話師を見上げ、何か言おうとするが喋れず、結局口をつぐむ。

話師「巣立ちの日については、後で他の灰羽に聞きなさい。……さて、同志ラッカよ。光輪も頭上に定まり……」

ラッカ、また髪の毛が光輪にひっつき、さらに赤面。

話師「……オホン。羽も体と調和し……、あー、まあ調和し、よって今日よりお前を灰羽連盟の一員として迎えるものとする。これがその証となる」

話師、灰羽手帳をラッカに渡す。

話師「それがあれば、日々の暮らしに必要なものは手に入る。我々がそれを保証する。だが、引き換えにお前はこの街で働く場所を見つけなければならない。自分のため、自分たちの住み処のため、幼い同志のため、お前は良い灰羽であらねばならない。……我々はいつもここにいる。困った事があったら来なさい。他に何かあるか？」

▲話師とラッカの会話、初稿から。つい調子に乗ってひと笑い入れようとしたが、話師の威厳が無くなるという事でボツになった。まあボツにして正解ですね。

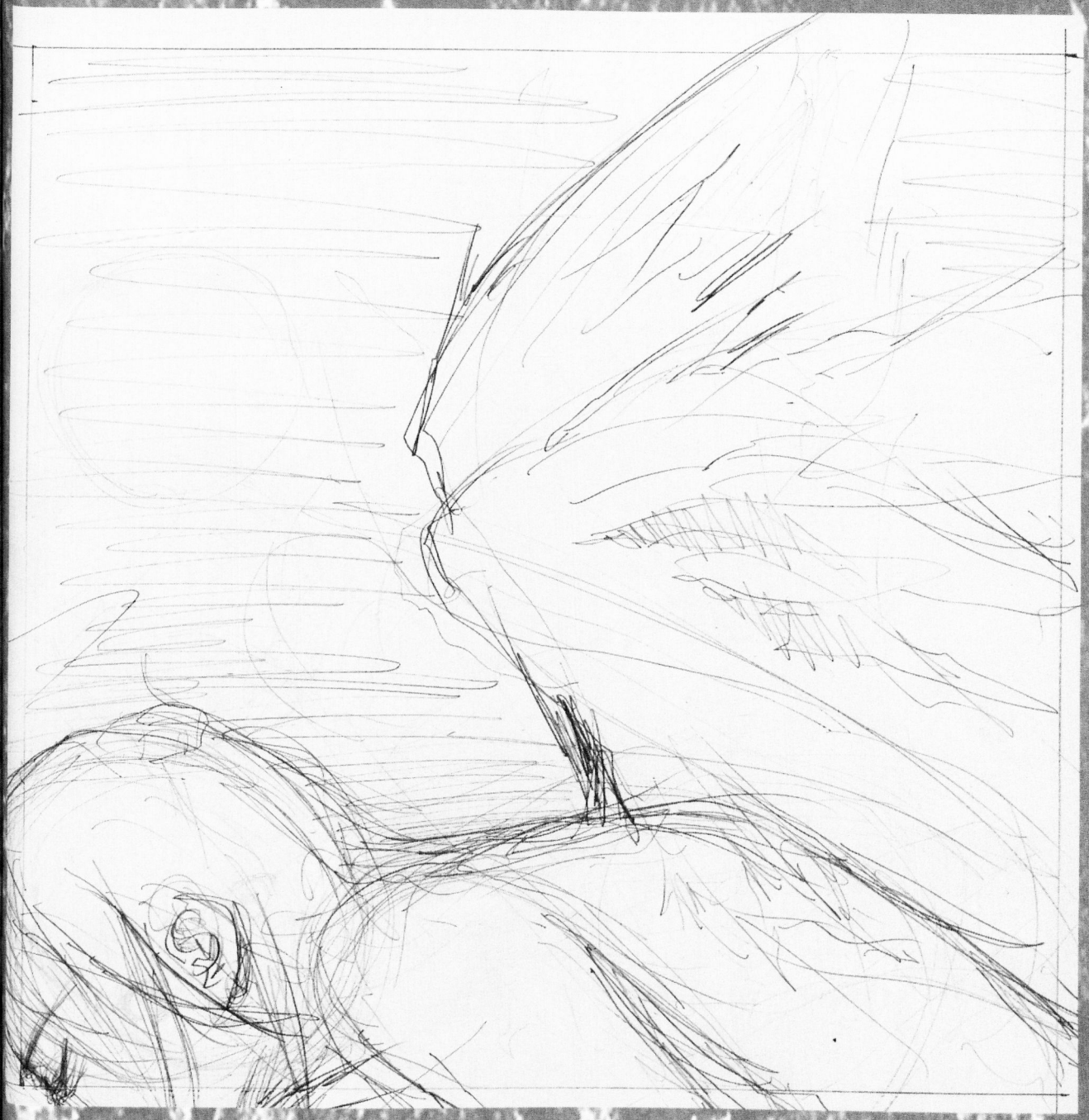
■ヒカリ、おまけシール。右がラフ、左がクリンナップ後。手で光輪を触っているポーズにするか迷った跡がある。

■カナ、おまけシール。下絵では、手を下げている。ヒカリとポーズがかぶったので、調整したものと思われる。また、描き損じの紙を上下逆さにして使っている。あまりやらない事なのだが、時間がなくて慌てていたのだと思う。

■右ページはパイロット版のジャケット下絵。これはラフを切らず、ケント紙にいきなり描いている。実際のジャケットの絵とは、ラッカの顔が全く違う。これは着彩の際、ちょっとリアル目に影をつけたら顔の印象がラッカのイメージとはずいぶん違ってしまっていて、上田プロデューサーにボツにされたため。確かレイヤー処理を変えて、色々な雰囲気で計7パターンほどつくってみたがどうしようもなく、諦めて顔だけ新たに線画を描き、着彩し、アイコラのごとく上から張り込んでいる。そのための下絵が右図。レイヤー処理された画像の上に、素で描いた絵を乗せて、手作業で色と位置と大きさを合わせるのは大変な手間だった。

■左は次ページで紹介するポスターの、ボツになったラフ。雰囲気は気に入っていたので、仕上げたらそれなりにいい絵になったような気もする。そして次の40ページがポスター下絵のラフ、41ページが正式な下絵。改稿の結果、椅子が室内の椅子からベランダのものになり、ラッカのポーズも変わっている。その結果、ちょっと物悲しい雰囲気になった気がする。

このポスターも、通常の着色の後、非常に複雑なレイヤー処理を行って、セピアというか、黄色っぽい画面にしたのだが、とにかく印刷で色が潰れてしまい、色稿を何度も出して調整してもらった。レキの胴体辺りの影色が潰れてどうしても空気感がうまくでないのだが、そこを出すために全体を明るくすると、明るい部分が飛んでしまう。大変だった。



■この絵と左ページの絵は、Blue Flowというマキシシングルのジャケットラフ。レコード会社側から、『あまりアニメのキャラクターを前面に出さないデザインで』というような要望があり、キャラクターの顔が切れて、羽を中心にしたデザインと、僕が普通にイメージしたデザインの2点を出して意見を聞いたところ、やはりキャラクターがいた方がいいという事になり、左ページのデザインをベースに作業を進めた。

■これが最終的なジャケット下絵。この絵でやっと羽の描き方、塗り方が掴めた気がする。これもまた、ラッカに見えなかったらしく、『誰？』とよく言われた。一応ラッカです。ただ、物語に出てくる日常性を持ったラッカではなく、灰羽という不思議な存在の象徴、という雰囲気を出したかったので、ラッカを描くというより、灰羽という存在の普遍的なイメージを意識しました。

色彩設計

色彩設計

色彩設計

色彩設計

色彩設計

原作/シリーズ構成 安倍吉俊 ～オールドホームの灰羽達～ エグゼクティブ・プロデューサー 川村明廣 川村明廣

(PIONEER LDC) 小林 小林 洋輔(PEA) 助監督/設定補佐 大森貴弘

キャラクターデザイン 高 高田晃 デザインワークス キムヒロミチ 美術監督 片平 真司 片平真司

色彩設定 遠藤菜緒美 コンポ コンポジットディレクター 長牛豊 録音演出 本山 本山哲

編 編集 後藤正浩 音楽 大谷幸 オープニングテーマ「Free Bird」 作曲・編曲:大谷幸

オリ オリジナルサウンドトラック盤 パイオニア パイオニアLDC 音楽制作 イマジン

プロデューサー ueda yasuyuki (PIONEER LDC) Henry後藤 (PEA)

岩 岩谷能宣 (ラデ (ラディクス) 春名剛生 (フジテレビ)

監督 ところともかず ところともかず 制作 制作 RADIX RADIX

製作 光輪密造 光 光 光 光 光輪密造工房 フジテレビ

原作/シリーズ構成 安倍+安倍吉俊

～オールドホームの灰羽達～ エグゼクティブ・プロデューサー 川村明廣

(PIONEER LDC) 小林洋輔(PEA) 助監督/設定補佐

大森貴弘 キャラクターデザイン高田晃 デザインワークス

キムヒロミチ 美術監督 片平真司 色彩設定 遠藤菜緒

遠藤菜緒美 コンポジットディレクター 長牛豊 録音演出

本 本山哲 編集 後藤正浩 音 音楽

大谷幸 オープニングテーマ「Free Bird」 作曲・編曲:大谷幸

音楽制作 音楽製作 イマジン プロ プロデューサー

ueda yasuyuki (PIONEER LDC) Henry後藤 (PEA)

岩谷能宣 岩谷能宣(ラディクス) 春名剛生(フジテレビ)

監督 ところともかず 制作 製作 RADIX 製作 光輪

光輪密造工房 フジテレビ 大谷幸 大谷幸

原作/シリーズ構成 安倍吉俊 ～オールドホームの灰羽達～

エグゼクティブ・プロデューサー 川村明廣 川村明廣(PIONEER LDC)

小林洋輔(PEA) 助監督/設定補助 大森貴弘 設定補佐

キャラクターデザイン高田晃 デザインワークス キムヒロミチ 美術監督

片平 片平 片平真司 色彩設定 遠藤菜緒美

コンポジットディレクター長牛 長牛豊 長牛豊 録音演出 本山哲

編集 後藤正浩 後藤正浩 音楽 大谷幸 大谷幸

オープ オープニングテーマ「Free Bird」 作曲・大谷幸

オリジナ オリジナル・サウンドトラック盤 パイオニアLDC

音楽製作 音楽制作 イマジン 作曲・編曲:

プロデューサー ueda yasuyuki (PIONEER LDC)

Henry後藤 (PEA) 岩能 岩谷能宣(ラディクス)

春名剛生(フジテレビ) 監督 ところともかず

制作 制作 RADIX 製作 製作 光輪密造工房

フジテレビ へきなこ用 春名剛生 Henry後藤 作曲・編曲:大谷幸 製作

エグゼクティブ・プロデューサー 川村明廣 (PIONEER LDC) 小林洋輔(PEA)

助監督/設定補佐 大森貴弘 キャラクターデザイン 高田晃 デザインワークス キムヒロミチ

美術監督 片平真司 色彩設定 遠藤菜緒美 コンポジットディレクター 長牛豊

録音演出 本山哲 編集 後藤正浩 音楽 大谷幸

オープニングテーマ「Free Bird」 作曲:大谷幸 オリジナル・サウンドトラック盤 パイオニアLDC

音楽制作 イマジン プロデューサー ueda yasuyuki (PIONEER LDC)

Henry後藤 (PEA) 岩谷能宣 (ラディクス) 春名剛生(ラディクス)

監督 ところともかず 制作 RADIX 制作 光輪密造工房 フジテレビ

原作/シリーズ構成 安倍吉俊 ～オールドホームの灰羽達～

■こんなん載せるなと言われるかもしれませんが、オープニングテロップです。信じられない事に僕の手書きです。僕はずいぶん色々な役職があったのですが、たくさんありすぎて入り切らないので上田さんに『原作』の一言で片づけられてしまいました。まあ『雑用』にされなかっただけいいか。

こういう文字って、きれいに書かねば、と思うほどにおかしくなってゆくもので、訳の分からない書き直しが大量にあります。一度間違うと、変なループに入ってしまって、書き直しているうちにだんだん自分が書いているのが文字なのか図形なのか分からなくなってきたりしますよね。この他にも音楽の大谷幸さんの名前がどうしてもうまく書けなくなって、A4コピー紙一面に『大大大大谷大谷幸幸大谷大大大大谷……』と延々書いたやつが一枚あったのですが紛失。

■次ページからの2枚は同人誌『灰羽せいかつ日誌』のカラーピンナップの下絵。しかし、この絵はもともと、DVDジャケットの1巻として描かれた。最初に描いた一人で椅子に座るラッカの絵がボツになり、代案として描いたのが、続刊で紹介するが、草原に座り、光輪に止まった蝶を見ているラッカで、これも上田プロデューサーから「ジャケットなんだから目線が変なとこいってる絵はダメ」といわれてボツになり、この絵は締め切りぎりぎりで描いた。しかし、やはりちょっと絵に勢いが無い。これは描いた後で自主的にボツにして、本当にぎりぎりのところで、今のジャケットの絵になった。この時も、何日も徹夜が続いて、しかも描いた絵が次から次へとボツになり、心身共に非常にきつかった。

奥付

灰羽連盟脚本集第参巻

発行責任者　ＡＢ／安倍吉俊

発行元　むてけいロマンス

発行年月日　２００４年１２月３０日

連絡先　abetc@mac.com

無断転用を禁じます